地域包括ケアシステム時代における
病院図書室の地域医療者支援
－マグネット・ライブラリーを目指す
エンベディッド・ライブラリアンの試み－

佐藤　正恵
放送大学教養学部情報コース

１．背景：日本の医療と病院図書室をめぐる状況

厚生労働省は、ベビーブーマー（いわゆる団塊）世代が後期高齢者となる「2025 年問題」に向け、超高齢社会の医療計画のロードマップを作成している。地域包括ケアシステムを構築して専門医と家庭医の役割分担を図り、さらに各医療機関はその機能を明確にすることが求められている[1)]。病院図書室は、医療法第 22 条で地域医療支援病院に設置が義務付けられた施設である。日本の医療機関の施設数は、病院 8,480 施設、一般診療所 100,995 施設である。そのうち、都道府県から承認された地域医療支援病院は 499 施設ある[2)]（平成 27 年 9 月現在)。承認施設は医療法第 4 条における要件として病床数 200 床以上、紹介率および逆紹介率基準達成、図書室を含む共同施設、研修の実施等を満たしている。即ち、地域医療支援病院の図書室は、地域包括ケアにおいて地域医療者に対する研修のサポートおよび学術支援を行う役割がある。

２．エンベディッド・ライブラリアンの役割

また、図書館員の新たな役割として、米国で提唱された「エンベディッド・ライブラリアン」が注目されている[3)]。エンベディッドとは「溶け込んだ」という意味であり、日常業務において図書館から利用者が活動している場へ、利用者と行動を共にして情報サービスを行う役割をいう。1970 年代より米国では病棟回診に参加するクリニカル・メディカル・ライブラリアン（臨床司書）が活動していたが、現在では図書室資料電子化のメリットを活かし、より積極的にチーム医療に参画することが可能になってきている。

３.「マグネット・ライブラリー」を目指して

米国看護協会は、指定要件を満たす病院を「マグネット・ホスピタル」として認定している。看護職や医療者､患者を磁石のように惹きつける魅力のある病院という意味である。これに倣い、筆者の造語として「マグネット・ライブラリー」を提唱したい。地域医療への学術支援という役割を果たし利用者を惹きつけるための取り組みについて述べる。

【引用文献】

1)厚生労働省.地域包括ケアシステム http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/ bunya /hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/　2)厚生労働省.医療施設動態調査（平成 27 年 9 月末概数）.3)鎌田均.「エンベディッド・ライブラリアン」: 図書館サービスモデルの米国における動向.カレントアウェアネス No.309,2011.9.